〔臨時客應接〕主人御茶漬にといふ、略○中 但茶を掛る時は、茶漬茶碗を盆へ受取、自分の前に置、略○中 主人御飯を御替被成といふ、略○中 客人の膳の右の脇へ盆を出し、飯茶碗を受取、自分の前に置、略○下

〔兎園小說十二集〕大酒大食の會

文化十四年丁丑三月廿三日、兩國柳橋萬屋八郎兵衞方にて、大酒大食の會興行、連中の內稀人の分書拔、略○中 飯連常の茶漬茶碗にて、萬年味噌茶づけ香の物ばかり、

〔男色大鑑八〕執念は箱入の男

もはや吸物は宵から六色か、今一度桂川の柳魚に松茸をあしらいて、蓋茶碗にて輕う出せ、略○下

〔風俗俳人氣質一〕主人の名代に妾宅へ見舞初日より二日めの

蠅入ずのひらきを、自身立て明、何やらふた茶碗を、そこら中へならべ、略○下

〔槐記〕享保十四年二月十六日、入江樣御成、拙右京大夫 夜ニ入テカケ物ノ御香アリ、略○中 ミジヤナイ、犬ノコエ、道安ヨリ出 蓋茶碗、略○下

〔棠大門屋敷五〕浮世川身は捨小船

錦手のふた茶碗、南京の燒物皿、さしみは、ひつへぎにもりこぼし、略○下

〔四方のあか下〕春色花鳥媒

その小袋と小娘に、ほんに油斷はならぬ坂や、この手がしはのふた茶碗、われてひゞけてひゞたけの、入間の里の里ちかき、略○下

〔好古小錄下〕此間下賤ノ飯盌ヲ、ヂャウギ碗ト云、ヂャウギハ定器ト書ベシ、老學庵筆記ニ、故都時定器不入禁中、惟用汝器、以定器有芒也、

〔饅頭屋本節用集知財寶〕定器